

程なく秋になりて、肩輿にて師の舊宅の前を過けるに、月のいとあかりければ。

舊宅人亡異昔時。唯看明月照東籬。秋風未散無窮恨。莫遣鄰家笛裏吹。

こゝに來てさすが名残のをしきかな空しき宿に残す月影享保癸丑のとし鳩巢の室直きよ、駿臺の草堂にして涙に筆をそめてしるし訖。

一、太極圖述の儀室鳩巢來狀

手足の痛寒氣故不宜、朝などはすきと不叶致難儀候へども、精神未衰候故指て苦勞にて不存候。只長夜に成候てふせられ不申、是には致難儀候。毎夜大方丑刻時分よりは目覺候て、曉更迄晝讀申候書の義理を、胸申にて反復推考いたし罷在候。心氣安まり不申養生には惡敷覺候得ども、可致様も無之候。乍去晝會得不仕奥義を、夜中に得申儀多有之候。是は益にも罷成候。此度著候太極圖述も、夜中に合点いたしたる儀多有之、過半出來今少に罷成候。朱子此圖解を被著候以後、老夫圖述の様成物承不申、性理大全諸儒の説、皆失朱子之意申候。老夫圖述は朱子の御意と餘り

相違仕間敷候。老夫一生の學力盡と申書と存候間、皆濟候はゞ何とぞ自筆にて調候て、貴殿へ形見に贈可申候。其方被寫候て其寫本を此方へ可給候。若孝七へ申遣候て、孝七が序を請可申候。不入儀ながら筆に任せ候。

一、駿臺雜話訂正の儀室鳩巢來狀

駿臺雜話の事。仁集に章甫の事申たる所に、髪を被るの俗と申事有之候。只今其許より被越候本を、水戸へ被遣置候故しかと覺不申候。其被髪は誤申候。莊子の本文斷髮にて候。成程越人は斷髮にて被髪とは違申候。最前覺違にて髪を被ると調候。此度水戸の源太左衛門方より申越心附候。且又此度被申越候。由比殿被申候吉野の雲の事、是も成程尤に御座候。老夫は最前古今序にも心付不申、古今花は雪にたとへ、紅葉は錦にたとへ候故、吉野の雪にいたし申候。古今序を用吉野の雲、龍田の錦といたし候はゞ宜敷可有之候。但又すぐに吉野の花、龍田の紅葉といたしたる方もよく可有之存候。何れにてもくるしからぬ事に候。其外和歌を舉申所に、少づ相違の儀候由、不案内の儀に候間、可爲左様存候。宜敷御直し可給候。源太左衛門方よりも、ひ

たと少づ、料簡申越候。畢竟少づ、詞の上の儀に候へば、相違したる儀は餘り害無之候。其故凡例にも其段調置候。

九月十四日

一、室鳩巢の祭小寺遼路文二編

嗚呼遼路而至此耶。吾昔在北唱道於家。學徒膺至接踵相加。子未弱冠。撫衣斯集。爾來強學夙夜汲々。迨吾東徒促裝是急。徒步送我至境上邑。山中惜別佇立以泣。思之如昨。風牛何及。嗚呼哀哉。惟子好學自持謹厚。秉心塞淵不易其守。公獲於君私信於友。如子學行無愧。前脩。求之今世罕見其醜。乃如是人國士之尤。縱未素識聞亡悲愁。况相知深餘三十秋。雖以壽終慨嘆未休。况年過強黔然黑頭。宜其使我涕泗交流廢寢與食他事僉投。嗚呼哀哉。去歲祇役。千里著鞭顧我草堂。不覺席前。歲月荏苒。淹留一年。躬訪書問。不少遲延。人篤交誼有如此全。觀其奉公揚々周施。私心悅懌期子榮遷。今既往矣。茫如夢然。天道難信。誰云佑賢。嗚呼哀哉。前日所贈手書猶留。好意殷勤何其綢繆。始言。微恙不日欲瘳。醫藥匪懈。幸無爲憂。終言首途。今當先候。多事倥偬公私相襲。願復一別歲月悠々。冀卜間

暇面別之求。書來三日。前言未酬。豈圖溘焉忽云歸幽。嗚呼哀哉。雖然死生人之常期。脩身俟命。寧每生爲。况子好學有年于茲。朝聞夕死。天壽無疑。在子如此。吾復何悲。但所恨者。吾黨日衰吾道日孤。老獨見遺。自願遼々將復何之。嗚呼哀哉。吾初聞訃。奔赴當先。自以衰頹身爲病纏。臨哭不能。執紼無緣。深負故人。心有闕焉。既葬三月。始克告阡。啣哀致敬告辭乃虔。黃流盈酌。氤氳香燭。寄哀一奠。有淚漣々。嗚呼哀哉。尙饗。

○

嗚呼遼路有知耶。將無知耶。吾聞之。人能世稀之行。天必有世稀之報。吾始信之。今以遼路之不幸觀之。不能無疑於其言焉。夫人有茂材異行。不幸早世者天下亦多有之。然其未亡也。飲食鍼藥。無所不慎。而死則死於家人之手。其既亡也。棺槨衣食無所不備。而葬則葬於先人之塋。此其死葬之事。所得能爲者。舉皆如其所欲。而無毫髮遺恨。猶且親戚朋友。莫不哀其早世。而以其不獲於天爲恨焉。若夫遼路之學行。固爲國人之所稱。可謂世稀之行者非耶。今以盛壯之年方且報國之日。千里離家。一年畢役。歸期業已